

県央史談会バス研修
一県下名勝史跡四十五佳撰第 30 位畠山地蔵尊と
三浦一族の史跡を訪ねて一

令和元年 7 月 14 日（日）

コース 仙光院（葉山町長柄）～長徳寺跡・畠山地蔵尊碑（葉山町長柄）～浄楽寺（横須賀市芦名）～満昌寺（横須賀市大矢部）～近殿神社（横須賀市大矢部）～薬王寺跡（横須賀市大矢部）～清雲寺（横須賀市大矢部）

はじめに

11 世紀の初め頃、相模地方にも武士団と呼ばれる、馬上にまたがっての騎馬戦を得意とし、経済的基盤も有する有力な集団が出現していた。主人を中心として郎従（ろうじゅう）・郎党（ろうどう）・家人（けに）などと呼ばれる部下で組織されていた。武蔵の横山党などもその例である。

11 世紀半ば、陸奥国の大豪族安倍氏と陸奥守源頼義との間で「前九年の役」の戦いが起こるが、頼義は隣国出羽の清原氏一族や相模の武士団の加勢により、俘囚長阿部貞任（きだう）・宗任（むねとう）兄弟を打ち破る。ここで、三浦爲通が大きな戦功をたて、恩賞として三浦郡の地を与えられ三浦氏の始祖とされるが、後世の系図や縁起などで信用に乏しい。

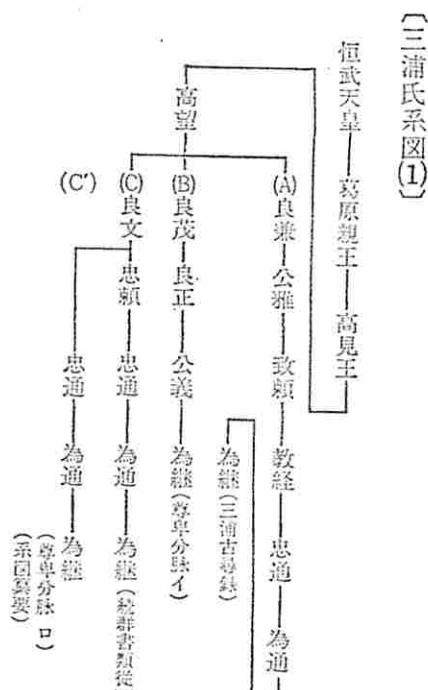
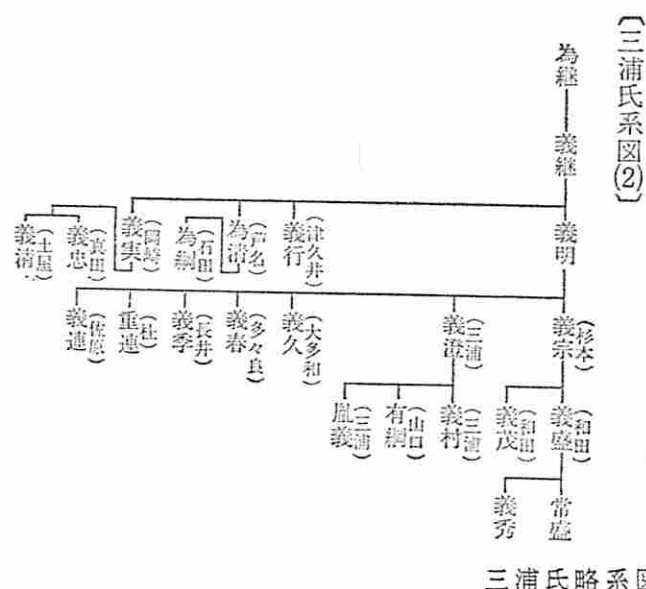
20 余年後、奥州では再び永保 3 年(1083)から寛治元年(1087)の「後三年の役」が起こる。陸奥守源義家（頼義の長子）と清原氏一族との戦いであるが、爲通の子三浦平太郎為次（為継）が活躍するが、この爲次が系図上でも三浦一族の祖とみられる。

三浦一族は三浦半島を主な基盤とし、西は相模中央部、東は東京湾を越え房総半島にも進出している。兄弟や子供には親の所領を分与し、土地の名を名字とする家を興させている。特に相模中央部の国衙周辺には、義明の末弟義実が大住郡の岡崎を本拠に岡崎四郎を名のり、子供たちは佐奈田（平塚市真田）、土屋（平塚市）など、その地名を名字としている。また、義実の甥の為綱は三浦半島の芦名氏から分かれ、愛甲郡の石田（伊勢原市）を本拠地とし、石田を名のっている。

治承 4 年(1180)、源頼朝が反平氏の旗上げを行うと三浦一族はこれに呼応し出兵するが間に合わず、衣笠城で応戦するも安房に敗走するが、同じく敗走してきた頼朝と合流し勢力を盛り返し、源家ゆかりの要害の地鎌倉に本営を築いた。頼朝は鎌倉に侍所を置き、三浦一族の和田義盛（義明の孫）を長官にあたる別当に任じた。三浦一族は最も有力な武士団のひとつとなった。

正治元年(1199)、頼朝が亡くなると北条氏の勢力が強まり、古参の和田義盛排除の動きが建保元年(1213)の和田合戦となり、同族の三浦義村の寝返りにより義盛は打たれ、味方した相模の武士団の多くが滅んだ。さらに三浦氏と北条氏の対立が決定的となった宝治元年(1247)には、三浦泰村（義村の次男）ら五百余名は、頼朝の墓がある法華堂にこもり自害し、ここに三浦一族本流は絶えた。泰村の妹を妻としていた評定衆毛利季光（西阿）もこれに殉じた。三浦一族の支流佐原氏は、北条氏に加わり生き

延び、盛時が三浦を名のり一族の命脈をつないだ。



■ 長柄桜山古墳群 (ながえさくらや) 国指定史跡 平成 14 年

逗子市と葉山町にまたがる丘陵のピークに所在する 2 基の前方後円墳。ともに 4 世紀後半頃の築造。500 ほどの間隔がある。

第 1 号墳は、全長 91.3m、後円部径 52.4m の大きさで、墳頂部は標高 127.3m、現存する県内の古墳では最大である。前方部は西側、後円部は東側を向く。東京湾から房総半島を望む。墳丘は岩盤を削り出したのち、後円部と前方部の上に盛土をして造っている。墳丘は後円部 3 段、前方部 2 段に築かれており、古墳の上には円筒埴輪 (えんとうわ) と壺形埴輪 (つぼがたわ) が立て並べてあった。後円部中央には、木棺が腐って落ち込んだ長さ 7m の陥没坑 (かんぼう) が発見され、部分的な発掘調査により、粘土槨 (かんど) と呼ばれる木棺 (もくかん) を粘土で覆った構造の埋葬施設が 1 基築かれていることがわかった。

第 2 号墳は、全長約 88m、後円部径約 50m の大きさで、標高 101.5m、第 1 号墳にはみられない葺石 (ふし) が存在する。葺石は、古墳の表面に石を貼り付けて古墳を飾る築造技術。1 号墳と同じく前方部は西側、後円部は東側を向く。また、第 1 号墳とよく似た円筒埴輪と壺形埴輪が見つかった。

■ 仙光院 (せんこういん) 三浦郡葉山町長柄 1439

長谷山真福寺仙光院。真言宗。永正年中(1504～1520)に長寛阿闍梨 (あじかり) が開基したと伝えられる。『新編相模国風土記稿』には「永正中長寛が再興する云々」とあり、永正より前に既に開基されたと考えられる。長寛は鎌倉地方に真言宗を広めた真言宗史上重要な名僧。当寺は、戦火や山火事により 2 回火災にあい、現在の本堂は大正 2 年(1913)に再建されたもの。(境内設置の説明版)



畠山地蔵尊

○ 畠山地蔵 葉山町指定重要文化財 像高 165.5 cm

鎌倉時代中期、運溪道人の作といわれ、源頼朝の右腕として活躍した畠山重忠(はたけやまた)の念持仏として知られている。長柄長徳寺が所有していたが、堂が老朽化したため、平成 15 年(2003)仙光院に移され、翌年境内に地蔵堂を建立し安置した。現在は葉山町の重要文化財に指定されている。(堂前の説明板)

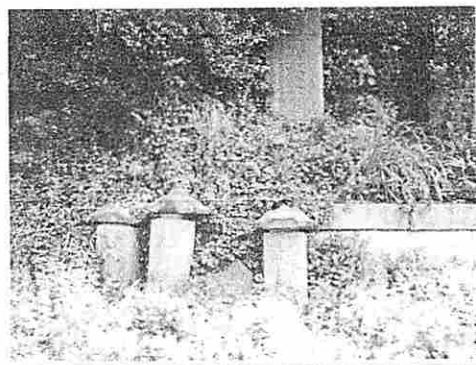
○ 畠山重忠 長寛 2 年(1164)～元久 2 年(1205)

平安・鎌倉時代初期の武士。関東平氏秩父氏の一流で、武蔵国男衾(おぶさ)郡畠山郷(埼玉県深谷市畠山)を名字の地とする在地領主。在庁官人を指揮する武蔵国内最有力御家人。父は重能(しげ)、母は三浦大介義明(みうらのおおき)の娘、妻は足立遠元の娘、のち北条時政の娘と再婚。治承 4 年(1190)8 月、源頼朝が挙兵すると在京中の父に代わって 17 歳で平氏方の大庭景親に属し、その追討に出陣。頼朝軍との合流ができず本拠地に引き返す途中の三浦一族の軍と由比ヶ浜で激戦を交えたが、勝敗つかず、その後改めて河越太郎重頼らと三浦一族を衣笠城に攻めて、外祖父三浦義明を自害させた。しかし、同年 10 月同族豊島氏、葛西氏の斡旋により頼朝に降伏し、鎌倉御家人となる。平氏追討や奥州合戦に武功を上げた。元久 2 年(1205)北条時政の後妻牧の方との不和を背景に、武蔵国進出を図る北条氏の策略により武蔵国二俣川でわずか百数十騎で幕府の大軍と激戦の後、愛甲三郎季隆(すゑか)の射た矢に当り討ち取られた。重忠は剛勇、廉直の鎌倉武士の典型としてしられ、また、文治 2 年(1186)4 月、静御前が鶴岡八幡宮の廻廊で舞をみせた際に銅拍子(どうびし)をうつなど、歌舞音曲の才にもめぐまれていた。『国史大辞典』『朝日日本歴史人物事典』『嵐山史跡の博物館ガイドブック 菅谷館の主畠山重忠』)

■ 長徳寺跡(ちやうとくじあと)

『新編相模国風土記稿』は、「白田山と号す、本尊地蔵は長五尺運慶作畠山次郎重忠守護仏と云う」と記す。

安部倉山登山道入り口左手には 45 佳撰碑を始め、馬頭観音・牛明神を納めたコンクリート製の祠、庚申塔(享保 14 年(1720)、寛政 12 年(1800)ほか)、五輪塔、地蔵菩薩立像(7 基)、墓碑、無縫塔などがある。畠山重忠念持仏とされる地蔵菩薩立像はこの地蔵堂に安置されていたが、老朽化のため平成 15 年(2003)に、北へ 300m ほどの仙光院へ移された。



45 佳撰碑と石造物

○ 県下名勝史跡 45 佳撰第 30 位 「畠山重忠公御守護地蔵尊白田山 長徳寺

安部倉山登山道、長徳寺跡入口左手にある。

■ 浄楽寺(じょうらくじ) 横須賀市芦名 2・30・5

鎌倉光明寺末。浄土宗。金剛山勝長寿院大御堂浄楽寺。和田義盛がこの地に建てた阿弥陀堂を義盛の死後、光明寺の寂恵が中興。

寺伝は源頼朝が父の菩提のため建立した鎌倉の勝長寿院（大御堂、本尊は成朝(せいちょう)作阿弥陀三尊）を、のち二位禅尼平政子（北条政子）が和田義盛に芦名に移させたと伝える。阿弥陀如来三尊、不動明王立像、毘沙門天立像はともに鎌倉時代、運慶作で国重要文化財。（『国史大辞典』）

○和田義盛 久安3年(1147)～建保元年(1213)

三浦大介義明の孫で義宗の子。治承4年(1180)源頼朝の挙兵に応ずるが、平家方の攻撃を受けて安房国に脱出し頼朝に合流。同年南関東一帯を制圧し鎌倉に入った頼朝により侍所別当(きむらいどう)に任ぜられた。文治5年(1189)の奥州合戦の際、侍所所司(しよ)の梶原景時(かじわらとき)と共に軍兵の召集に当たり、自身も出陣して戦功を挙げた。正治元年(1199)頼朝が没すると、侍所の職務を二分してきた梶原景時を失脚させ、元久2年(1205)時政の後妻牧の方が將軍実朝を廃そうとする陰謀が発覚して（平賀朝雅(ひらがとまさ)の乱）時政が失脚すると、幕閣の最長老として隠然たる勢力をもつようになった。しかし、建保元年(1213)北条義時の策謀にはまり和田合戦が起こり、義盛は一族と共に敗死した。（『国史大辞典』『朝日日本歴史人物事典』）



毘沙門天立像

勢至菩薩立像

阿弥陀如来坐像

観音菩薩立像

不動明王立像

○ 阿弥陀如来坐像 像高 141.8 cm。檜寄木造(ひのきぎぞう)。彫眼(ちやうがん)。印相(いんさう)は来仰印(らいおういん)。張りのある頬や厚い胸、衣文の彫は深く、全体に重量感にあふれる。寛文5年(1665)、文化12年(1815)、天保8年(1837)に金箔や彩色が加えられた。

○ 観音菩薩立像 阿弥陀如来脇侍(きよと)（向かって右側） 像高 178.8 cm。檜寄木造。彫眼。宝髻(ほうけき)を高く結び上げ、やや腰を捻る。両腕から垂れる天衣(てんい)は後補。金箔彩色は天保8年(1837)加えられたもの。

○ 勢至菩薩立像 阿弥陀如来脇侍（向かって左側）



金剛寺阿弥陀如来坐像
(厚木市)

像高 177.1 cm。檜寄木造。彫眼。両腕から垂れる天衣は後補。金箔彩色は天保 8 年(1837)加えられたもの。

○ 毘沙門天立像 像高 140.5 cm。檜寄木造、玉眼。邪気を踏んだ姿は躍動感があり、引き締まった顔面たくましく鎌倉武士を想起させる。彩色は寛政元年(1789)に塗替え。「運慶小仏師十人」の墨書を有する銘札が像内にあった。

○ 不動明王立像 像高 135.5 cm。檜寄木造。玉眼。忿怒(ぶんに)の形相に力強さがみなぎる。彩色は寛政元年(1789)に塗替え。毘沙門天と同種の銘札が像内にあった。

○ 像内の銘札 木造の銘札は月輪(がしん)形の下に蓮華座を墨書し、その下に長い蓮茎(れんけい)のついた形。総高 71.5 cm。月輪の直径 14.5 cm。蓮茎の幅 5 cm。厚さ 1.2 cm。表は月輪の中央に多聞天の種子ヴァイを墨書、蓮茎部に「一切如来心秘密全身舍利宝篋院印羅尼」を記し、さらに梵字が左側面から裏面に続く。右側面には「大日如来真言」と梵字 6 字、さらに「多聞天真言」と梵字 15 字を記す。そして裏面に次の銘を記す。

「文治五年(己酉)三月廿日(庚戌)大願主平義盛芳縁小野氏／大仏師興福寺内相応院勾当運慶小仏師十人／執筆金剛仏子尋西浄花房」

この意は、義盛と小野氏(義盛の妻は横山党(小野党)横山時広の妹)の発願により、興福寺相応院勾当の大仏師運慶が弟子 10 人を率いて制作したものである。これを書いたのは尋西浄花房だが、どのような人物か不明。

浄楽寺の仏像は、文治 2 年(1186)北条時政の発願により制作が始まった伊豆の願成就院のもの(阿弥陀如来坐像、不動明王立像、毘沙門天立像)と酷似し、胎内銘札も非常に似ている。(『国史大辞典』「浄楽寺の仏像と運慶」(久野健)、「三浦一族と和田義盛」)

○ 前島密の墓 天保 6 年(1835)～大正 8 年(1919)

近代郵便制度を創設した明治時代の官僚、政治家。「日本郵便の父」と称される。正しくは前嶋(まえしま)。越後国頸城郡下池部村(新潟県上越市)の豪農、上野家に生まれる。幼名房五郎、次いで来輔。13 歳で江戸に出て苦学しながら医学・蘭学から英学、兵術、航海術など諸般の学術を習得した。慶応元年(1865)、薩摩藩に招かれて開成学校で英語を教授し、翌年江戸にもどり幕臣前島錠次郎の家を継いだ。明治 2 年(1869)新政府に出仕、このころ密と改名。明治 3 年(1870)、駅通権正(えきとろごんせい)に就任、維新後も存続した江戸時代の飛脚が、遅滞、不着が甚だしいうえに高額のため、飛脚に代わる郵便事業創設を決意。明治 4 年(1871)、イギリスから帰国、駅通頭に任ぜられ近代郵便制度を東海道～大阪間で開始し、郵便切手を発行する。翌年郵便を全国に実施、明治 6 年(1873)郵便事業の政府専掌、全国均一料金制を確立した。明治 8 年(1875)には郵便為替、貯金を創業。明治 14 年(1881)の政変により大隈重信と共に下野して立憲改進黨の結成に加わり、20 年(1887)東京専門学校(早稲田大学)の校長となる。(『朝日日本歴史人物事典』『国史大辞典』)

■ 満昌寺(まんしょうじ) 横須賀市大矢部 1・5・10

臨済宗建長寺派。義明山。源頼朝が自身の挙兵にその命をささげた三浦大介義明を

弔うために建立したという。『吾妻鑑』には、建久5年(1194)9月29日「三浦矢部郷の内に一堂を建立すべきの由、思しめし立つ。故介義明の没後をとぶらはれんがためなり。今日仲業に仰せて、その地を巡検すと云々」(『全譯吾妻鏡』)と記されている。

創建時の宗派は不明だが、鎌倉末期仏乗禅師天岸慧広(てんがく)が中興開山し、臨済宗建長寺派となった。天岸慧広は鎌倉円覚寺第一座、報国寺の開山の名僧。江戸時代に火災にあい、再建に合わせ旧山号の雲龍山を改め義明山としたと伝える。

本堂背後には、建暦2年(1212)和田義盛によって創建されたという御霊神社があり、木造義明坐像を祀る。また、御霊神社背後の奥の院には鎌倉末期の五輪塔、宝篋印塔、板碑があり三浦義明の廟所といわれる。

○ 木造 三浦義明坐像 (国指定重要文化財)

寄木造、玉眼。像高 81.4 cm。頭に別木の冠をのせ、右手に笏、腰に太刀を佩く。長いあごひげをはやした老人の顔には、つりあがった目、頬から口元にかけてなどに写実的なところがある。体は両肩をはり、量感を感じる。衣文の彫りは簡単で、膝前は体全体に比べやや低く弱い感じである。鎌倉時代後期の作とみられる(横須賀市指定文化財解説)。

○ 石造双式板碑 (横須賀市指定重要文化財)

高さ 116~118 cm。幅 27~29.5 cm。2基の板碑は阿弥陀三尊種子板碑と釈迦三尊種子板碑で、主尊が異なる以外は、ともに緑泥片岩製、大きさがほぼ同規模で、元応2年(1320)の紀年銘が刻まれている。光明真言の梵字は全く同じで、2基1対の双式板碑である。この2基の板碑は、現在満昌寺境内、三浦義明坐像が安置されている御霊神社で保管されているが、元は満昌寺の東側にある薬王寺跡のやぐら内にあったものである。横須賀市内には22基の板碑が残されているが、文永8年(1271)年の清雲寺板碑に次いで古く、また双式板碑としては県内最古である。(横須賀市指定文化財解説)

○ 木造天岸慧広座像 (横須賀市指定重文)

満昌寺に伝わる本像は寄木造、玉眼で、像高 76cm。その形姿は曲碌に安坐し、両袖と裳裾裳裾(もす)を垂下する。通形の頂相彫刻で、特に頭面部の個性的な風貌を写実的にとらえており、建武2年(1335年)の没後間もないころに制作されたものと考えられる。(横須賀市指定文化財解説)

○ 磨崖仏 (横須賀市指定史跡) 横須賀市大矢部 1丁目 179-1

西面している山腹の凝灰岩の岩肌二面に仏像が、他の一面に溝状のものが彫刻されている。左端の面には直径 20cm の円内に蓮華座に坐した仏像が線刻されたものが七箇横に並び、中央の面には高さ 60cm 程の来迎仏が線刻され、その面の右下には小さな納骨用と思われる穴が存在する。右端の面には幅 15cm、長さ 280cm の溝状の彫り込みがあり、何か建築物と接していたものかと考えられる。付近には川砂利の写経石が散乱し、鎌倉時代の仏教文化を物語る広い意味での磨崖仏として、三浦半島では、珍しい史跡である。(横須賀市指定文化財解説)

○ 伝三浦義明廟所 (横須賀市指定史跡) 横須賀市大矢部 1-5-10

墓域周囲の土塀は、寛延2年(1749)に三浦志摩守等三浦同族の修理による。義明の

墓といわれる宝篋印塔を中心に、向って右側に五輪塔、左側に板碑の三基が並び置かれている。五輪塔は総高 70cm の凝灰岩製で鎌倉末期の型式をとる。水輪上部には納骨穴が穿たれ、空風輪は後補である。宝篋印塔は、総高 82.8cm の安山岩（伊豆石）製で、鎌倉末期～室町期の型式をとる。九輪と基台は後補である。四面に金剛界四佛種子を彫る。『新編相模国風土記稿』に「五輪塔一基社の背後にあり、大介の首塚と言う、是を奥院と称す」とあって義明墓を五輪塔としているが、五輪塔が宝篋印塔にかわったのは誤記が不明である。現在では宝篋印塔を義明、五輪塔を義明の妻、それぞれの供養塔と考えるのが一般的である。板碑は、塔身高 140cm の緑泥片岩（秩父石）製で、梵字（サ観世音菩薩の種子）及び銘文を刻字した薬研彫（断面が V 字型の彫り）の力強さから鎌倉末期の作と考えられる。（横須賀市指定文化財解説）

■ 近殿神社（ちかどのじんじや） 横須賀市大矢部 1-9-3

三浦義村の木造を御神体としてを祀る。『新編相模国風土記稿』は、「近殿明神社、村の鎮守なり、神体木造、長一尺余、三浦駿河守義村の霊を祀る」と記す。

■ 薬王寺旧跡（やくおうじききゅうせき）（横須賀市指定史跡） 横須賀市大矢部 1-216

薬王寺は仏頂山と号し、建暦 2 年(1212)鎌倉幕府の侍所別当であった和田義盛が父義宗や叔父義澄の菩提を弔うため創建したものと伝えられるが、明治 9 年(1876)頃廃寺となった。もとの本堂跡はここより東南の位置にあったという。石塔群のうち凝灰岩製の方形石を三重した石塔は、三浦荒次郎義澄の墓と伝えている。最下石の四方には胎蔵界の種子が配され、二層・三層の石の上方には納骨穴様のものが穿たれている。（横須賀市指定文化財解説）

■ 清雲寺（せいうんじ） 横須賀市大矢部 5-9-20

清雲寺は三浦義継が父為継の供養のため建立した寺（現臨済宗円覚寺派）という。

○ 伝三浦為継とその一党の廟所（横須賀市指定史跡）

三浦為継とその一党とは三浦氏初代為通、二代為継、三代義継をいう。この地には中央の三浦為継墓と伝える五輪塔が存在したが、昭和 14 年（1939 年）に付近にある深谷の円通寺跡やぐら群から為通、義継の墓と伝える五輪塔を移転し、三代の墓として祀ったものである。左右いずれかが為通、義継の墓か不明であるがいずれも凝灰岩製で鎌倉時代の様式を示している。左右にある石塔群は三浦九十三駒墓と伝えられ、2 基の五輪塔と共に移された。

○ 文永 8 年在銘板碑（横須賀市指定重要文化財）

元は円通寺跡やぐら群の傍らにあったが、上記五輪塔などと共に移された。相模国域で最大の武蔵型板碑は、鎌倉長谷寺の弘長 2 年(1262)板碑であり、二番目に大きいのが満昌寺の市指定史跡「伝三浦義明廟所」の板碑である。清雲寺の板碑は高



伝三浦為継とその一党の廟所

不詳現高 140.0cm、幅 44.0cm であり、長谷寺板碑と満昌寺板碑の間に入る大きさである。銘文中の「左衛門小尉平盛信」は佐原光盛の子盛信に比定され、「先考」は光盛にあたり、この板碑は光盛の 13 回忌の造立であるが、盛信はこの板碑の造立の翌年の文永 9 年(1272)に北条氏の内紛「二月騒動」に巻き込まれ自害している。板碑の銘文が歴史史料と合致する事例である。以上の事から、「石造板碑文永八年在銘」は重要な歴史資料である。

銘は「文永八年五月十四日左衛門小尉平盛信」「右志者先考／聖靈当十三／年遠忌為也／仏得道造立／供養如件敬白」。(横須賀市指定文化財解説、説明版)

■ 衣笠城跡(きぬがさじ) (横須賀市指定史跡)

大谷戸川と深山川に挟まれた半島状の丘陵が衣笠城跡である。康平年間(1058 年～1064 年)三浦為通によって築城されたといわれ、以後為継・義継・義明の四代にわたり三浦半島経営の中心地であった。治承 4 年(1180)8 月、源頼朝の旗揚げに呼応して、この城に平家側の大軍を迎えての攻防戦は、いわゆる衣笠合戦として名高い。合戦の行われた場所は衣笠城の大手口で、坂を登って滝不動に達する。居館はその附近にあったかと推定され、一段上に不動堂と別当大善寺がある。さらに、その裏山に金峯山蔵王権現を祀った社が存在した。また、その西方の最も高い場所が、この城の詰の場所であったと伝えられている。このように、この地一帯は平安後期から鎌倉前期の山城で、鎌倉時代の幕明けを物語る貴重な史跡である。(史跡説明板)